

## “F”は何の“F”？

指導主事 兼 生徒指導専任主事 三口 清伸

益田教育事務所が、授業力向上研究推進校と銘打って授業づくりからかかわる学校訪問、いわゆる「継続型訪問指導」を始めて3年目になりました。通称“F”と呼んでいるこの訪問指導は、これまで小学校の国語と算数で毎年管内の希望校2校ずつでおこなってきました。さらに今年度は、中学校英語にも枠を広げて取り組んでいるところです。

この“F”の大きな特徴は、授業に至るまでのところで、学校や授業者の考えや要望にお応えして、何度でもどんな形でも授業についてかかわっていく点です。回数や時期をはじめ、対象の先生や内容、かかわり方に至るまで決まった形がなく、これまでひとつとして同じようなかかわり方をした学校はありません。我々も該当校に「ぜひ指導主事を自由にご活用ください」とお伝えしています。

そんな“F”のコンセプトは、授業について先生方と共に語り合うということです。その内容は当然それぞれですが、その中でどの先生方にも共通して言えることが2つあります。

1つ目は、どの先生方も授業について本当に熱心に語られるということです。その授業に対する思いやねらい、時には悩み、葛藤なども話されます。指導案だけではつかみにくいことを共有することで、授業実践のふり返りが違った視点でできることも、“F”の醍醐味のひとつと感じています。

2つ目は、先生方は授業について語っているようで、例外なく子どもについての話になっているということです。「うちのクラスは…」「うちの児童は…」と、常に目の前の子どもをイメージされながら、授業を組み立てようとしていることが伝わってきます。一方、わたし自身は「学習指導要領では…」「この学年としては…」「他校の実践では…」という枕詞で、その授業づくりへアプローチすることが多くなります。お互い語り合うことで、子どもの現在の姿と目指す姿がはっきりしたり、新しい一面を発見できたりします。すると、先生方がイメージしていた授業の形であったり、悩みの根っこであったり、言語化され、具体化されて、授業づくりが進展するという場面にもよく遭遇します。このように、先生方のアプローチと私たちのアプローチを擦り合わせながら授業づくりができることも、わたしたちが授業づくりにかかわる意義のひとつだと感じています。

「学力向上」が注目される中、授業の充実のために生徒指導が重要な意義を持っています。その生徒指導の基本である児童生徒理解を深めることにつながる方法のひとつが、この『授業について語り合うこと』だと思います。毎日が忙しく過ぎる中、そのような時間の確保が難しいという声をよく耳にします。確かに語り合おうと思えば、自分以外に相手が必要です。どの学校も時間確保のため工夫しているということをよく伺いますが、時には校内での調整が難しい時もあるかもしれません。そんな時は益田教育事務所にお声がけください。実は学校訪問指導実施要項には、従来の学校訪問指導にも「指導案審議や相談等の事前指導を含め、複数回の対応も可能である。」という文言を載せており、どの指導主事も皆様と授業について語り合える機会を待っているのです。

余談になりますが、通称となっている“F”の由来を問われることがあります。そもそもは3年前に初めて学校訪問指導実施要項に載せたときの分類記号が“F”であったというだけのことなのですが、この“F”が学校にとって「Free」に活用できる点、そして益田教育事務所が“F”を通して学校と「Family」のような関係になればという願いがある点から、とても相応しい通称だな、と個人的には気に入っています。そして、子どもたちの「Future」のために少しでもお力になればと思います。

## ライフキャリア教育が促進するひとつづくりの環

益田市教育委員会 派遣社会教育主事 谷上 元織

毎年夏になると、いくつかの地区で通学合宿が行われます。通学合宿とは、公民館などに宿泊しながら登校、学校生活を送り数日間を過ごす取組です。子どもたちの生活体験を豊かにしたり、コミュニケーション能力を高めたり、また、地域の子どもと大人の交流などを目的に実施されています。子ども同士の「横のつながり」と、子どもから大人という多世代間の「縦のつながり」が体験をとおして紡がれていきます。

さて、通学合宿では、どの地区にも、それぞれのドラマが生まれます。中でも、今年はひときわ印象に残る出来事がありました。今年で通学合宿 14 年目を迎える地区でのことです。これまで通学合宿を支えてきた地域のベテランたちに交じって、22 歳の青年がスタッフとして加わりました。

青年は、通学合宿の実施期間中、自らの仕事を終えると、毎日のように公民館に顔を出しました。夕方の自由時間、食事の時間、地域の方を講師に迎えての体験活動の時間など、積極的に子どもたちと関わり、彼の周りにはいつも笑顔と歓声が起るようになっていました。子どもたちと良い関係を築き、通学合宿のスタッフとして一生懸命取り組む彼の姿を、地域のベテランたちも目を細めて見守ります。

そして、最終日、通学合宿のまとめとして地域スタッフ一人一人があいさつをされる中、その青年が最後のあいさつを任されたのでした。

「僕は、14 年前にこの地区で通学合宿が始まったとき、最初に参加した子どもたちの一人です。そのとき、今、ここにいるようにたくさんの地域の方に支えられて、楽しく活動できたことを覚えています。今、ぼくは Uターンして、益田に戻ってきました。そして、今回こうして、スタッフとして久々に通学合宿に参加できたことを、とても嬉しく思います。これからも、今回のように、地域での活動に関わっていきたいと思います。」

彼の言葉から、子どもたちは今自分たちを取り囲む環境の素晴らしさと、未来の自らの姿をイメージするきっかけを得たのではないのでしょうか。

また、これまで地道に子どもたちと関わり続けてきた地域のスタッフからは、誇らしさと嬉しさで胸がいっぱいになっている様子も伺えました。地域の方々が、青年のロールモデルとなっていたことを実感した瞬間だったことでしょう。

益田市で推進する「ライフキャリア教育」は、益田でいきいきと暮らす大人との出会いをとおして、子どもたちの価値観を広げ、益田で生きることも含めて人生の選択肢を豊かにするものです。保幼・小・中・高と各年代において良きロールモデルとの出会いを位置づけて学び、時を経て次はその子どもが次代のロールモデルとなることを意図しています。横のつながりだけでも、縦のつながりだけでもなく、「循環するつながり」づくりこそ、これからの益田市の未来を担う人材の育成において、不可欠なものであり、それを意図的にしかけていく必要があります。

各年代に関わる我々大人が大切にしたいことは、ひとつの年代での成長に固執することなく、長い目で成長を見守る広い視野と、自らもロールモデルの一人として、子どもたちにいきいきとした姿で関わろうとする姿勢といえるでしょう。



↑通学合宿での地域スタッフと子どもたちの活動の様子